

エレミヤ書第31章7節-14節

聖マタイ福音書第2章13節-15節、19節-23節

於：聖パウロ教会 司祭 山口千寿

今日の福音書の物語は、ヘロデ大王に追われてエジプトへ逃げていく聖家族の物語です。ヘロデ大王は、自分の宮殿にユダヤ人の王として生まれた幼子を礼拝するために訪ねてきた占星術の学者たちに、その子の様子を知らせて欲しいと頼みました。しかし学者たちは、夢でヘロデのもとには帰るなどお告げを受けて、別の道を通して自分たちの国に帰ってしまいました。ヘロデは学者たちに騙されたことに気付くと、大変怒りました。そして、ベツレヘムとその地域一帯の2歳以下の子どもたちを皆殺しにする命令を下します。ある本の中に、当時、ベツレヘムの人口は2000人程度であったから、この時殺されたこの年齢の男の子の数は、25人くらいであったろうと推測されています(『最初のクリスマス』)。

この物語については聖書以外には記録がありませんので、聖書の記事を他の資料で確かめることができません。しかし、ヘロデ大王の性格を考えたならば、この残虐な物語が事実でないと断言することはできません。むしろあり得る話だということになるでしょう。

ヘロデ大王は、紀元前40年に「ユダヤ人の王、ローマの友」という称号をローマの元老院から与えられますが、名実共にユダヤを支配するようになったのは紀元前37年から死亡した紀元前4年までの33年間でした。この間にいくつもの建設事業を行っています。宮殿や要塞、エルサレムの壮大な神殿、カイサリアなど都市の建設、水道の整備などを進めた業績は、独裁者ならではのものでした。またローマの権力者が変わるたびに上手く取り入って、自分に有利なように事を運ぶにも巧みな才能を発揮した人物です。

しかし、自分の王としての地位が脅かされようとすることには人一倍敏感で、周りの人々に対して常に猜疑心をもって対していました。彼の疑いの目は自分の身内にも向けられ、息子たちの死刑の許可を度々ローマに求める手紙を書き送った程でした。後に実際に3人の息子を殺害しています。また彼は5人の女性と結婚していますが、その内の最愛の妻マリアンメと叔父との間に不義の疑いを持ち、嫉妬の余りマリアンメを殺してしまいます。この他にも何人もの身内のものを殺害しました。彼の家臣では、殺された者の数が分からないほど沢山いたということです。晩年には病気のせいもあったでしょうが、人を信じることができず、常に疑いの目でしか見ることのできない人物でした。自分の死の 때가近いことを悟った際には、自分が死んでも誰も悲しまないのではないかと思い、競技場の中に指導者たちを何千人も集めて閉じこめ、自分の死と同時に弓で射殺すように命じたということです。そうすれば自分の死と同時に国中が嘆き悲しむだろうと思いついたからです。この命令は、妹のサロメによって取り消され実行されませんでした。ヘロデは病気で苦しみながら孤独の中で死んで行きました。

このヘロデの晩年にイエスさまはお生まれになりました。ですからヘロデが自分

の地位を脅かそうとする者が現れたとして、幼子を皆殺しにしたことは十分考えられることです。ヨセフは夢の中で天使のお告げを聞いて、直ちにエジプトに向けて避難の旅に出ました。そしてどの位の期間エジプトに滞在したか分かりませんが、そんなに長いことではなかったでしょう。間もなくヘロデの死亡したことが天使によって知らされます。そこで聖家族はイスラエルに帰国をします。しかし、ヘロデ大王の後を継いだ3人の息子の内、アルケラオがユダヤ、イドマヤ、サマリヤ地方を治めていました。このアルケラオの政治は大変苛酷なもので、普段は仲が悪く、敵対していたユダヤ人とサマリヤ人が、たまりかねて一緒になってローマに彼の悪政を訴えたほどでした。余程ひどかったことが分かります。この結果、紀元6年に彼は王の地位を追われることとなります。

そのアルケラオが支配していた地域、ベツレヘムもその中に入りますが、そこを避けてヨセフの家族はガリラヤに向かいます。そこは、同じヘロデの息子ですがアンティパスが領主として治めていましたが、この人はアルケラオより温厚な性格だったといわれています。そしてヨセフ一家はナザレに住むこととなります。イエスさまは公の活動を開始するまでこのナザレで育ち、教育を受け、大工として父親のヨセフを助け、またマリアや兄弟姉妹たちを支えていくこととなります。

マタイは、聖家族がエジプトに避難して滞在したことを、旧約聖書の預言の実現と見ています。「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」というホセア書のみ言葉です(11:1)。そしてナザレに住んだことも「彼はナザレ人と呼ばれる」という預言の実現だと言っていますが、旧約聖書にこの言葉と丁度合う預言は見当たりません。しかしイザヤ書の「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで その根からひとつの若枝が育つ」(11:1)という有名な預言の中の「若枝」という言葉を、ギリシャ語に訳すと「ナザレ人」という言葉と近い発音になるので、この箇所からマタイは引用したのではないかと考えられています。

いずれにせよ、イエスさまはナザレ人として知られていました。そのイエスさまが、ダビデの町ベツレヘムでダビデの系統から生まれて、そして旧約のイスラエルの民をエジプトから導き出したモーセと同じように、神さまの使命を果たすためにエジプトから呼び出されたのだ、ということをマタイは言いたいのです。

イエスさまは幼くして圧制者の手によって命を狙われました。ヨセフやマリアはこの幼子の命を守ることに必死な思いで逃げて行ったことでしょう。

20世紀は難民の世紀であると言われました。21世紀に入ってもはや10年以上が経ちましたが、難民となっていた人たちはどうなったのでしょうか。戦争や民族紛争が起こるたびに多くの人々が敵対する相手方から家を追い出され、着の身着のまま無理矢理に追われていくのです。そしてそれらの難民の陰には、奪われた多くの命があるのです。今でもアフガニスタン、イラク、スーダン、その他の地域で家を奪われ、持ち物もなく国境を目指して黙々と歩いていく人々の群れがあります。恐怖と絶望、飢えと渇きの旅を続けなければなりません。家族が別れ別れになり探して歩くことなど到底できない状態の中で、安否を気遣いながら落ち着き先を求めて歩いていく人々です。

このような世界の中にイエスさまは来られ、人々の苦難をご自分の身に受けられたのです。そして、そのような苦難を生み出すところの敵意を滅ぼすために、十

十字架に向かって進んでいかれたのです(エフェソ 2:16)。別れ別れになって対立していた2つのものを一つにし、平和をうち立てるために十字架について下さったのです。

今日の旧約聖書日課では、神の民が世界の隅々から集められるという希望が語られています。かつて散らされた民が、弱い者の群れが、神さまの慰めと導きのもと、一つに集められて祖国に帰って行く。喜びの涙を流しながら国に帰ることができる歓喜の行進の姿を描いています。この希望の実現を今日も世界の多くの人々が、自分の故郷から追いやられた人々が、待ち望んでいます。そして世界の現実がどのようなものであったとしても、神さまのこの約束は、イエスさまによって既に成し遂げられたことを信じ、今はその御業が完成する時を待ち望むのが私たちの信仰です。そしてこの信仰に立ったときに、現代の世界にあって、聖なる幼子の日の特権にあるように、「強いみ力により圧制者の企てをくじき、正義と愛と平和の支配を確立して下さい」と祈ることができるのです。

新たな年を迎え、私たちの歩みがこの世界の中で主の平和のために奉仕するものなることができますように祈り求めたいと思います。